臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！

今こそ動労大改革へ！

「陶ってはダメだ！もっと働こう！」の産報化・新マル生運動路線を確定し、臨調の手先、当局の番犬に転落

日刊 動労千葉

82, 12, 24

No. 1128

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

動労「本部」革マルの裏切りの歴史 その4

裏切りの基本構図が確定　1982年　3月　～　9月　「臨調推進・国鉄再建」、第2鉄労へ

1982年　3月　5～6日　動労第115回中央委員会

⑩ついに産報化・新マル生運動たる＝「働こう運動」を路線化！

数々の裏切りの積み重ねの上に、一九八二年、動労「本部」革マルは遂に決定的な転向をとげた。〝国鉄再建のためには：〟と「新マル生運動」＝既得権はき出し・働き度向上・国鉄労使安定化宣言たる「働こう運動」の路線化である。これは、

①労働者階級・人民の怒りと決起力をまるで信用しないで、〝厳しい冬の時代〟という敗北的危機意識のみを大うつしに強調することによって、

②危機・ぜい弱なるがゆえに今日凶暴化している支配階級を、全く逆に美化＝強大視することによって、「闘ってもだめだ」との屈服の論理づくりをおこない、

③更にそれを反動的にエスカレートさせて、「国鉄労働者は働き度を高めるべき。国鉄を守る（＝再建合理化に協力する）ことが労働者の職場と生活を守ることだ」と結論をこじつけ、ついには「従って、合理化絶対反対や職場からの実力闘争では、もはや大刀うちできない」「闘うべきでは無く、今は働き度を高めるべきとき。これは、後退局面における特殊な戦術である」（第一一五回中央委方針）とペテンとどう喝をもって、全国で動労組合員の闘いを禁圧する方針を決定したのである。

そして、具体的には、「現在の要員で所定時間内の作業を高め輸送量を増やす」「車両運用、要員需給などを当局の要求を入れて前むきに対処」「旅客・貨物利用誘導、需要開発を当局と協力して組合も取り組む」なる、当局・支配階級になりかわって、動労組合員に生産性向上運動を強要し、屈服を強制するという反動的な方針である。

昭和史に見る『産報運動』＝『働け運動』の歴史

1941年（S.16年）
8月30日、重要産業団体令公布
9・2　翼賛議員同盟結成（326人）
9・12　産業報国会〝働け運動〟開始　←（動労革マルの先輩!!）
10・18　東条英機内閣成立
12・1　御前会議　対米英蘭開戦決定
12・8　対米英宣戦布告

年表資料は、毎日新聞社刊「一億人の昭和史」シリーズNO.15「昭和史写真年表」より抜粋

いつか来た道……
＝『働こう運動』は、戦争への道＝

産業報国会発会式 S.15年12月10日結成の東京電燈産報

⑪臨調＝自民党の手先、国鉄当局＝反動太田労政のしもべ　に転落

㋑7月30日：臨調基本答申出される

㋺3月～7月：自民党、国鉄当局と卑屈なゆ着＝ゴルフ・酒席談合

●談合のメンバー＝自民党国鉄小委員会三塚、ロッキード汚職議員加藤、国鉄本社職員局長太田、動労東京地本委員長松崎明。●談合の場所および回数＝銀座・六本木の料亭・クラブで数回。

㋩7月1日：東京地本革マル分子＝海宝、長谷川を千葉に送りこみ「転勤」

㋥9月：三里塚闘争破壊＝反対同盟解体を狙って、悪質なデマ宣伝で北原事務局長を攻撃して、逆に全人民から弾劾される

◆既得権剝奪攻撃の突破口として攻防の最重要焦点となっていた「ブルトレ問題」での動労革マルの裏切りはかく行われた。

新聞　昭和57年7月14日

これに対し組合側は、鉄労を除く三組合（国労、動労、全動労）がいち早く、返納拒否を決める。

・・・・・・

期限の同月三十一日までに返納に応じたのは、該当職員の一割に過ぎなかった。六月十五日、当局は「六月末までに返納せよ」という内容証明付きの督促状を郵送する。

返納拒否の国労、動労、全動労の間に動揺が生じた。まず、動労が非公式にある人物を介して職員局と接触したあと、返納に応じることに同意した。

・・・・・・

ブルートレインのヤミ手当返納をめぐる経過は、国鉄が

※この時期からの顕著な特徴＝単なる「日和見」や「闘争放棄」などというものではなく、「闘う労働者・人民を背後から襲うファシスト」としての姿を鮮明にさせてきた、ことである。以降、実践的には「鉄労との共闘、国労・動労千葉・総評の解体」路線がはっきりと定着する。（以下つづく）

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！